

社会的成熟度の発達と形成要因に関する研究*

東京教育大学

松 原 達 哉**

I 問題と目的

社会生活に必要な社会的生活能力の発達の程度を測定する方法として、Doll, E. A. (1947) が社会的成熟テスト (Social Maturity Scale) を作製しており、わが国では、牛島義友(1949), 山下俊郎(1954), 倉石精一(1949) 鈴木清(1961), 杉田裕(1949), 杉田裕ら(1959)の研究がある。しかし、こうした社会的生活能力は、子どもが社会的环境の中で多かれ少なかれ獲得する能力であり、それは社会化の過程のひとつと見なされる。だから身体的発達、知的発達、親のしつけ、社会的生活水準や地域環境などによつて影響されるところが大であると考えられる。そのひとつ、身体発達をとつてみても、戦後、にわかには加速度をましているものであり(前田喜明, 1956), ただこれだけからでも、子どもの社会的成熟度が、そこになんか大きな変化を見せているのではないかと考えられるのである。

そこで4才から8才までの子どもの社会的成熟度を、作業能力、運動(移動)能力、意志交換能力、集団への参加能力、自発性(自主性)、自己統制、基本的習慣(清潔・排泄・着衣・睡眠・食事)の面から研究し、さらにこうした社会生活能力の発達に影響を与える要因について若干の考察を加えようと思う。

II 方 法

1. 調査項目の作製

Doll の作製した Vineland Social Maturity Scale, 牛島義友の社会的生活能力検査、杉田裕らの社会生活能力検査、山下俊郎の基本的生活習慣の習得基準などを参考にし、幼児・児童の生活力の諸相について7領域 180の行動項目を作った。その内容は、次のようである。

- (1) 作業能力 (Occupation) ……いろいろの作業の遂行に関するもの、20項目
- (2) 運動(移動)能力 (Locomotion) ……身体を自分の思うところへ移動する能力に関するもの、20項目
- (3) 意志交換能力 (Communication) ……ことば、文字などによる自他の意志の交換能力に関するもの、20項目
- (4) 集団への参加能力 (Socialization) ……社会的集団生活に参加する能力に関するもの、20項目
- (5) 自発性(自主性) (Spontaneity) ……みずから進んで責任をもつて行動する能力に関するもの、20項目
- (6) 自己統制 (Self-control) ……わがままをおさえ、忍耐強く自己の行動を統制する能力に関するもの、20項目
- (7) 基本的習慣 (Fundamental habit) ……乳幼児が生理的生活を合理的に統制し、周囲の社会生活に適応して行くために必要な基本となる生活習慣で、
 - ①清潔—身のまわりをきれいにする習慣に関するもの、10項目
 - ②排泄—大便と小便についての自主的な習慣に関するもの、10項目
 - ③着衣—衣服を着たり、脱いだりする習慣に関するもの、10項目
 - ④睡眠—睡眠についての自立の習慣に関するもの、10項目
 - ⑤食事—食事の正しい習慣に関するもの、10項目
 以上の質問項目を作製し、質問紙法によつて調査研究した。

2. 評定者・評定段階

各項目は、子どもの世話をよくし、子どもを最もよく知っている保護者(主として母親)、またはそれが不可能な場合には保育所などで子どもを受持つ先生(主として保育母)に、各行動項目がどの程度実行されているか、その能力がどの程度発揮されているか、を評定してもらった。

* The development and effective factors in social maturity of children

** by Tatsuya Matsubara (Tokyo University of Education)

その評定は、日常生活での諸能力を「できる」「できるだろう」「できない」「できないだろう」の4段階に分けて行ない、前2者の評定をいずれも1問1点、後2者の評定をいずれも1問0点とした。

3. 調査記入事項

前述の調査項目のほか、(1)子どもの出生時の状態（出生時の体重、正常・仮死・逆子・双生児の別など）(2)健康状態（消化不良・肺炎・脳膜炎・頭部外傷・結核などの病歴の有無）(3)兄弟数・出生順位 (4)家族数などについて調査対象児の母親に記入してもらった。

4. 調査対象

(1) わが国の人口分布を考慮し、大都市、中小都市、農山漁村の地域にわけ、次の幼稚園・保育所・小学校を選んだ。

④ 幼稚園（都市）

①明照幼稚園（釧路市）、②春日部幼稚園（春日部市）、③二葉幼稚園（水海道市）、④柳北幼稚園（東京）、⑤鷺宮学園幼稚園（東京）、⑥浮間幼稚園（東京）、⑦中央会堂幼稚園（東京）、⑧川崎協立幼稚園（川崎市）、⑨垂水幼稚園（神戸市）、⑩島根大学付属幼稚園（松江市）、⑪白川幼稚園（大牟田市）。

⑤ 保育所・幼稚園（農山漁村）

①平田保育所（山形）、②日の出幼稚園（福島）、③中央開城保育所（茨城）、④豊田村北保育所（静岡）、⑤上羽栗保育所（岐阜）、⑥八剣保育所（岐阜）、⑦甲山保育所（広島）、⑧菊川保育園（山口）。

⑥ 小学校（都市）

①東栄小学校（釧路市）、②粕壁小学校（春日部市）、③錦糸小学校（東京）、④尾山台小学校（東京）、⑤住吉小学校（川崎市）、⑥二葉小学校（神戸市）、⑦島根大学付属小学校（松江市）、⑧黒髪小学校（熊本市）。

⑦ 小学校（農山漁村）

①浜田小学校（山形）、②好間第3小学校（福島）、③岩井小学校（茨城）、④豊田北部小学校（静岡）、⑤岐南町東小学校（岐阜）、⑥甲山町東小学校（広島）、⑦西市小学校（山口）。

(2) これからの幼稚園・保育所の2年保育、1年保育小学校1、2年生それぞれ男女ほぼ同数、計3000人を調

査の対象にした。それを年令別、地域別に示すと Table 1 のようである。

(3) 通過率の算出方法

7領域180項目について、これらがそれらの子どもにおいてどの程度実行されているかは、各年令群における各項目に対する評定者の評定得点数を見るだけでもだいたいわかる。しかし、ここでは、いわゆる通過率によつた。その算出は具体的には、次のようである。

$$\text{通過率(\%)} = \frac{\text{推定通過得点数} + \text{通過得点数}}{\left(\frac{\text{該当年令群の人数} - \text{無答の人数}}{\text{人数}} \right) \times \frac{\text{総得点数}}{\text{点数}}} \times 100$$

すなわち、該当年令群の人数から、その項目について評定不能であつたものを除いた人数の総得点数を分母とし、通過得点のほかに推定通過得点を加えたものを分子とした。推定通過得点を加えたのは、年長の子どもではある項目より上位の項目について評定を行ない、これ以下の項目は当然できるとみなして評定を行なわないことがあるからである。

III 結果とその考察

1. 各項目別の通過率

7領域180項目について、各年令群別にその通過率を算出した。これを一括表示すると Table 2 [(1) から (7e) まで] のようになる。これらの表は、男女合計の結果であり、項目の配列もほぼ通過率順にしてある。なお通過率70%前後を、その項目の実行がだいたい「できる」「できない」のわかれる年令と考えて、各表の右端にその可能年令を示した。さらに、牛島義友が昭和20年に社会的生活能力検査を標準化したとき、その通過率と可能年令（該当年令）を報告しているので、ほぼ類似の項目については、参考までにカッコ内にその値を併記した。

(1) 作業能力 (Occupation)

被調査対象児が4～8才であつたのに対して、問題内容がかなり低年令でもできるものを課したため、7番までが4才以下（4才で通過率が75%以上になつている）で可能になつている。このような傾向は、他の領域でも同様にみられる。昭和20年度の牛島の調査と比較してみると、15年以上たつた今日の子どもでは、各問題ともにくらか進歩がみられる。このことは、たとえば、「マッチで火をつけられるか」「お湯をわかすことができるか」などの能力についてみると、現代の家庭用品が、科学文明の急速な進歩によつて、操作が簡単にでき、安全が保たれるようになったため、子どもにも容易にできるようになつたことも含まれている。だから、子どもの作業能力としては、昔でも今日でもそれほど違いはないかもしれな

Table 1 調査人数

地域 \ 年令	4	5	6	7	8	合計
都市	194	436	532	452	187	3,000
農山漁村	117	257	314	323	188	
計	311	693	846	775	375	

いであろうが、その能力を発揮できるように社会生活条件が改善されたと解釈することもできよう。結果的にみれば、社会生活水準が高くなり、社会的成熟度も向上したといえるわけである。また、戦後の家庭における教育方針が、子どもの独立心や自主性を重視するようになり、しつけの改善がされたことにもよると考えられる。

(2) 運動(移動)能力 (Locomotion)

身体的成熟に基礎をおいた階段の登り降りや走行などは、かなり低年齢からできる。(精神薄弱児や身体障害者の場合は遅い〔荒川・古厩, 1963, 佐藤泰正, 1959〕) すべり台やぶらんこに乗るのもいすを使つて棚から物をとることなども4才で90%以上の子どもができる。しかし、社会規範に準じて移動したり行動したりする社会生活を営む能力は、4才以上にならないとできない。交

差点を信号にしたがつて渡ることや入場券や乗車券を買つて入ること、ひとりで電車やバスに乗れることなどは5才以上にならないとできない。しかし、ここでも15番の「交差点を信号通りにわたれる」能力は、昭和20年と比較するとかなりの進歩がみられる。これは、交通安全のための道路の整備や信号機の設置およびその進歩によるものと考えられる。また運動能力でも全身を巧妙に使つて行なう「なわとび」などは6才にならないと完全にはできない。

(3) 意志交換能力 (Communication)

ことば・文字などによつて自他の意志を交換する能力は、マスコミの発達と母親の余暇の活用・生活水準の向上などによつて、戦後かなり進歩したと推察される。

調査の結果では、4才以下で幼児語は解消し、自分で

Table 2 各問題の通過率

(1) 作業能力 (occupation)

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令
1	軽い荷物(カバン)なら両手にもつて運べる	99.4	99.4	99.5	99.6	99.7	4才以下
2	1枚ずつ本の紙をめくる	98.4	99.0	99.1	99.2	99.2	〃
3	水のはいつたコップをこぼさないで運べる	93.5	97.4	98.1	97.7	99.7	〃
4	はさみで三角や円などの簡単なものがきりとれる	89.0 (70.5)	95.5 (92.1)	97.6 (93.3)	98.7	98.9	〃 (4才)
5	かんたんなぞうきんがけができる	82.9	90.0	93.6	96.9	98.9	〃
6	ほうきが使える	79.4	91.9	96.0	98.6	99.4	〃
7	折り紙ができる	78.4	92.4	96.3	96.6	98.1	〃
8	ひもをむすんだり、ほどいたりできる	73.5 (61.7)	86.3 (88.3)	94.3 (98.5)	97.9	98.3	4 才 (4才)
9	はりえやはり紙のとき、のりつけがきちんとできる	70.6	87.0	93.7	94.5	97.5	〃
10	ぞうきんや手拭いがしぼれる	69.7	86.1	95.2	97.7	99.4	〃
11	子もりやお使いができる	67.7	82.3	90.7	95.5	97.0	〃
12	金づちがつかえる	57.4	72.0	81.9	85.7	90.1	5 才
13	ナイフやほうちようが使える	50.0 (6.4)	66.8 (30.5)	77.9 (56.1)	84.5 (79.4)	90.3 (92.1)	〃 (7才)
14	ときどき雨戸をあけたり、そうじをしたりする	43.2 (3.5)	51.0 (26.9)	72.6 (49.0)	79.7 (62.1)	87.0 (80.0)	6 才 (7才)
15	靴の手入れができる	41.6	57.9	72.1	77.8	88.4	6 才
16	マッチで火がつけられる	41.6 (15.8)	54.4 (32.1)	71.9 (49.1)	81.4 (74.1)	86.7 (87.9)	〃 (7才)
17	鉛筆をけずつて使う	30.0 (20.8)	49.8 (48.3)	73.4 (68.9)	86.6 (92.2)	94.5	〃 (6才)
18	お湯をわかすことができる	21.3 (2.1)	30.2 (21.9)	49.4 (40.0)	68.3 (57.2)	78.5 (77.9)	7 才 (7才)
19	草花の栽培や小鳥や家畜の飼育ができる	25.2	37.5 (4.4)	53.9 (12.1)	63.1 (32.7)	76.5 (68.3)	8 才 (8才)
20	自転車にひとりでのれる	25.5	26.4	33.2	40.8	51.7	8才以上

(注) ()内の数字は昭和20年に行つた牛島義友の資料

Table 2 (つづき) (2) 運動(移動)能力 (Locomotion)

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令
1	ひとりで階段を1つずつのぼれる	99.4	99.7	99.8	99.9	99.9	4才以下
2	走ることができる	99.4	99.5	99.6	99.7	99.7	〃
3	階段を1足ずつおりることができる	99.0	99.4	99.5	99.6	99.9	〃
4	庭を歩きまわる	97.7	97.8	98.0	98.8	99.3	〃
5	すべり台を危険なくすべる	97.4	97.7	99.3	99.4	99.9	〃
6	いすを使つて、棚から物をとることができる	97.1	98.4	98.8	99.2	99.6	〃
7	両足をそろえてとぶ	97.1	97.7	98.2	98.6	99.4	〃
8	30 cm の巾ならまたいでとべる	96.8	98.7	99.3	99.5	99.7	〃
9	ひとりで幼稚園や学校にいける	91.6	90.8	98.7	99.4	99.9	〃
10	ひとりでお友だちの家へいける	91.3	95.2	97.9	98.1	99.2	〃
11	ポストにハガキを入れることができる	81.3	93.1	96.6	97.9	99.7	〃
12	ぶらんこに立つてひとりでこげる	80.0	91.8	95.3	98.2	99.2	〃
13	はじめてのところで近いうちなら遊びにひとり でいける	74.5	84.7	91.6	95.0	96.7	4 才
14	車のよくとおる道をひとりで安全に歩ける	65.5	79.5	91.7	95.6	95.6	〃
15	交差点を信号とおりにわたれる	46.8 (0.8)	65.4 (7.5)	79.7 (28.7)	80.3 (49.5)	88.4 (74.5)	5 才 (8才)
16	自分の町や村を自由に歩ける	36.5	52.5	73.2	83.4	85.6	6 才
17	なわとびができる	32.6	51.5	77.4	89.8	96.1	〃
18	夜でも簡単なお使いができる	30.3	47.0	62.3	72.8	79.3	7 才
19	入場券や乗車券がひとりで買える	29.0	45.0	58.5	70.2	79.3	〃
20	ひとりで電車やバスにのれる	32.3	35.5	47.3	60.5	71.5	8 才

Table 2 (つづき) (3) 意志交換能力 (Communication)

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令
1	自分の名まえがいえる	99.0	99.6	99.7	99.8	99.8	4才以下
2	ほしいものをねだる	96.5	96.8	95.4	96.1	95.9	〃
3	自分でみたり聞いたりしたことを話す	96.5	96.7	97.8	98.1	98.8	〃
4	名まえをよばれたとき「はい」と返事する	95.8	96.0	97.3	97.4	99.3	〃
5	先生や友だちの名まえを正しくよべる	93.2	96.2	98.1	98.6	98.9	〃
6	いろいろなことを質問する	92.9	95.2	95.7	95.9	96.0	〃
7	「おはよう」「さようなら」が正てくいえる	91.3	94.5	95.5	95.9	97.2	〃
8	簡単なことづけを間違いなくできる	90.0	95.7	95.8	98.1	99.2	〃
9	幼児語(わんわん、ちんぷん、おかちなど)を使わない	89.7	91.9	92.1	93.5	94.4	〃
10	簡単な買物なら自分でできる	84.5	92.1	96.3	98.1	98.4	〃
11	「ありがとう」が必要なときに、いつもはつきりいえる	81.9	85.4	88.4	92.1	93.9	〃
12	自分の家から学校(幼稚園)までの道順がだいたいいえる	73.9	87.2	92.3	94.8	96.7	4 才
13	自分の住所が正しくいえる	59.7	77.8	86.6	92.4	96.7	5 才
14	ひとりが話すときは聞いていて、すんでから話す	69.0	71.7	81.0	83.9	89.0	〃
15	自分の名まえを正しく書くことができる	32.9	73.6	95.2	96.5	98.3	〃
16	1時間単位でだいたい時刻がわかる(3時とか5時を)	21.6	44.2	77.0	93.0	94.8	6 才
17	絵本の文字をすらすらよむ	23.2	29.9	66.1	86.3	92.5	6才半
18	電話でお話ができる	50.6	51.1	61.0	70.3	74.9	7 才
19	知らない人に道を聞かれた場合、はつきり受け答え ができる	27.4	42.9	60.5	76.1	85.6	〃
20	敬語が適当につかえる	31.9	41.7 (3.5)	59.5 (8.4)	70.8 (17.2)	74.9 (43.3)	〃 (9才)

Table 2 (つづき) (4) 集団への参加 (Socialization)

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令
1	友だちといつしよにごっこ遊びができる (乗物ごっこ, ママゴト, お店ごっこなど)	98.1	98.5	99.6	99.8	99.7	4才以下
2	ひとりであるよりみなといつしよにいることを楽しむ	95.4	96.1	96.7	97.5	98.9	〃
3	運動会の練習に喜んで参加する	91.9	94.8	97.3	97.8	98.6	〃
4	かくれんぼや石けりなどの遊びに加わることができる	90.6	96.4	97.4	98.1	99.7	〃
5	かくれんぼやブランコなどの遊びの規則や順番が守れる	86.5	93.1	95.6	96.8	97.5	〃
6	おもちゃをゆずりあつて使う	86.5	92.2	93.6	94.8	96.4	〃
7	自分のものを友だちといつしよに使おうとする	85.5	90.2	91.9	92.9	95.6	〃
8	だれでも喜んで仲間に入れる	82.6	88.6	93.5	95.4	95.6	〃
9	遊び方について, 友だちの話を静かに聞く	81.3	87.7	92.3	92.6	94.2	〃
10	学校 (幼稚園) や家庭で行なわれる行事に進んで参加する	81.6	87.6	92.3	93.8	95.0	〃
11	かけっこやゲームのとき人に勝とうとする	80.3	88.7	92.0	92.5	97.5	〃
12	順番がくれば皆の前で話をしたり歌つたりできる	68.4	77.6	84.0	88.4	90.1	4 才
13	きめられた時間をだいたい守る	55.2	76.5	84.8	88.5	90.6	5 才
14	トランプ, カルタ, すごろく等の簡単なゲームができる	47.4 (39.0)	73.4 (61.0)	87.8 (95.3)	95.7	98.1	〃 (5才)
15	遊びの規則や順番を人に教えることができる	48.4	71.1	84.8	92.3	93.1	〃
16	他人のことに気がつきめんどろが見られる	55.2	67.5	77.2	80.1	85.9	〃
17	年上の人に挨拶ができる	53.2 (66.0)	62.0 (83.4)	70.7 (60.7)	76.8	83.4	6 才 (4才)
18	ドッジボール, 陣とりなどの遊びができる	22.6	44.2	69.3	84.8	91.7	〃
19	遊びのきまりをかえたり新しく作つたりする	26.5	42.3	62.2	71.4	83.1	7 才
20	友だちと相談してスポーツや遠足の計画がたてられる	13.5	20.5	37.5	55.6	72.7	8 才

Table 2 (つづき) (5) 自発性 (自主性) (Spontaneity)

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令
1	おもちゃや絵本を自分で出して遊ぶ	99.0	99.2	99.3	99.5	99.8	4才以下
2	自分のものと人のものとを区別して扱える	95.8	97.0	97.3	97.9	99.2	〃
3	けがをしたらすぐおとなの手当をうけにくる	93.1	96.2	97.5	97.8	98.9	〃
4	できるだけ戸外で遊ぶ	92.9	92.9	94.5	95.0	97.0	〃
5	母や祖母からはなれてひとりで学校 (幼稚園) へ行くことができる	88.4	94.2	97.8	98.7	99.8	〃
6	自分から進んで遊びをはじめる	83.2	89.5	90.5	92.3	96.4	〃
7	こわれたおもちゃをなおすように申し出る	80.9	81.2	82.6	84.9	89.8	〃
8	友だちのおもちゃを横取りしない	80.6	87.7	92.8	93.6	93.6	〃
9	外に遊びに行くときは, 家庭に告げていく	77.4	86.6	87.4	89.0	90.6	〃
10	疲れると休息を自分でしようとする	75.2	79.5	83.1	86.6	92.0	4 才
11	約束したことをだいたい守る	72.6	86.0	89.4	91.4	95.0	〃
12	炎天に出るときすすんで帽子などかぶる	72.3	78.9	81.0	83.2	85.6	〃
13	他人の悪い行為を批判できる	68.1	77.9	83.9	88.3	88.7	〃
14	絵本をみてしまうとものにきちんとししまう	69.4	73.6	73.8	74.6	77.9	5 才
15	絵本はすぐに説明を求めないで自分で考えながらみる	55.5	71.6	81.4	86.3	92.8	〃
16	けがや病気にならないように注意する	56.1	65.8	76.5	81.2	87.8	〃
17	病人の看護や忙しいときの手伝いができる	52.3	60.3	76.0	86.7	89.8	6 才
18	おもちゃで遊んだあとは進んでかたづける	50.3	64.5	70.7	72.4	75.7	〃
19	遊びやしごとでリーダーになれる	44.1	57.1	61.2	70.2	74.3	7 才
20	いわれないでもお客さまに挨拶ができる	37.4	42.3	52.8	58.8	66.9	8 才

Table 2 (つづき) (6) 自己統制 (Self-Control)

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令
1	友だちに自分のおもちゃをかすことができる	93.5	95.8	96.8	97.4	98.6	4 才以下
2	危険な場所に近よらない	91.6	93.7	95.6	95.6	97.8	〃
3	危険な遊びはしない	88.7	93.4	95.0	95.5	97.0	〃
4	学校(幼稚園)やお使いの帰りに道草をくわない	85.4	86.7	88.1	89.0	92.3	〃
5	病気のとき、おとなしく寝ていることができる	83.2	86.0	89.4	93.0	94.0	〃
6	おなかをこわしたとき、おやつをがまんすることができる	97.4	86.1	89.4	90.3	91.2	〃
7	雨の日は室内でしずかに遊ぶ	77.1	78.5	78.9	79.5	79.8	〃
8	小さい子のめんどうをみる	71.6	80.1	87.1	90.2	94.8	4 才
9	少しのけがでは泣かない	70.6 (78.0)	81.8 (91.7)	84.9	91.6	93.1	〃 (3才)
10	夜中でも明るい、ひとりでお手洗に行ける	60.3	80.4	82.4	83.1	87.0	4 才半
11	自分より小さい子のわがままを許すことができる	60.6	72.7	79.2	83.0	89.2	5 才
12	小さいけがなら泣かないで自分で薬をつける	59.4 (42.9)	72.3 (60.0)	83.9 (82.2)	90.6 (91.2)	93.9	〃 (5才)
13	友だちのたべているものをほしがない	61.9	70.9	77.3	81.7	88.4	〃
14	友だちのおもちゃをほしがない	56.1	67.2	74.0	79.5	85.6	〃
15	外に遊びに出ても約束した時間に帰ることができる	52.9	65.8	74.2	78.6	79.8	〃
16	お客さまに出されたお菓子をほしがない	51.6	61.6	71.0	76.9	82.3	6 才
17	ひとりです番が2～3時間ぐらいできる	41.0	55.8	69.7	80.9	86.2	〃
18	年下の子が自分のおもちゃなどをいたずらしてもおこらない	58.7	66.2	68.4	70.0	77.3	7 才
19	自分が負けてもおこつたり、騒いだりしない	56.5	60.0	63.8	70.0	71.3	〃
20	買いぐいをしない	51.6	62.5	64.1	69.7	76.0	〃

Table 2 (つづき)

(7a) 基本的習慣—清潔—

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令	可能年令 (山下)
1	ひとりで手を洗うことができる	99.0 (100.0)	99.0	99.0	99.4	99.6	4 才以下 (2才)	2 才半
2	自分で鼻をかむことができる	96.8 (93.3)	97.4 (100.0)	98.6	99.2	99.7	〃 (3才)	4 才
3	ひとりで歯ブラシを使つて歯をみがくことができる	92.3 (53.6)	96.1 (67.8)	98.2 (94.5)	98.3	98.6	〃 (5才)	5 才半
4	入浴は喜んでする	90.2	91.9	92.1	93.7	94.9	〃	
5	汗がでたらハンカチでふく	89.7	95.1	95.5	96.5	96.7	〃	4 才
6	自分で髪をとかすことができる	86.8	87.4	90.7	91.1	93.6	〃	5 才
7	しごとや遊びのあとは手、足、顔を洗う	82.6	86.0	86.9	88.2	89.5	〃	4 才
8	はながでたらすぐにかむ	82.3	86.3	89.2	89.3	91.7	〃	4 才
9	風呂で身体の主な部分を自分で洗うことができる	75.8	85.9	90.4	92.9	93.6	〃	5 才
10	自分で爪をきることができる(きき手を使つて)	29.7 (10.6)	39.1 (37.4)	54.5 (64.4)	67.7 (77.9)	75.4 (93.1)	7 才 (6才)	

みたり聞いたりしたことの話ができるし、簡単な買物も挨拶もできる子が多い。しかし、住所を正しくいつたり自分の名前を正しく書いたりするのは、5才であり、1時間単位で時刻がわかつたり、絵本の文字がすらすらよ

めたりするのは6才半である。電話で話ができるのは7才、敬語が適当に使えるのも7才ころからである。

(4) 集団への参加能力 (Socialization)

社会的集団生活への参加は3才ころからではじめ、

(7b) 基本的習慣—排泄—

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令	可能年令 (山下)
1	オシメを使わなくてすむ	95.2	96.1	99.2	99.4	99.5	4才以下 (2才)	2才半
2	おしっこは完全にひとりでできる	97.4 (99.3)	98.3	99.0	99.1	99.4	4才以下 (3才)	2才半
3	遊びに夢中になつても、もらすことがない	93.2	95.1	96.8	96.8	97.8	"	4 才
4	おねしよはほとんどしない	93.2	93.8	95.2	96.3	96.7	" (3才)	3 才
5	ひとりでさつさと便所へいく	92.6 (99.3)	99.0	99.2	99.4	99.9	" (3才)	4 才
6	パンツをよごさない	92.6	95.7	96.2	96.3	98.3	" (3才)	4 才
7	用後は、ひとりでよく手を洗う	91.9	96.0	96.7	96.9	97.0	"	4 才
8	大便是完全にひとりでできる	91.6 (43.4)	96.8 (78.7)	99.1	99.5	99.7	" (4才)	4 才
9	大便のあとうまくふくことができる	86.1	94.5	97.6	98.5	99.4	"	4才半
10	たいてい朝きまつた時間に大便をする	71.3	72.3	80.6	81.8	85.9	4 才	

(7c) 基本的習慣—着衣—

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令	可能年令 (山下)
1	ひとりでたびや靴下をぬぐ	99.4	99.6	99.8	99.9	99.9	4才以下	2 才
2	ひとりで下駄や靴をはく	98.7 (98.6)	99.0	99.3	99.4	99.5	" (3才)	3 才
3	ひとりでパンツやブルマースなどをはく	97.1	98.8	99.6	99.7	99.8	"	4 才
4	ひとりで洋服をぬぐ	93.2	97.7	99.6	99.8	99.8	" (2才)	2 才
5	ひとりでたびや靴下をはく	91.3	93.4	98.6	99.0	99.7	"	4才半
6	衣服のほころびを親にしらせる	88.7	90.9	92.3	93.7	94.5	"	
7	洋服のボタンをかける	84.5 (96.4)	93.4	97.3	98.1	98.1	" (3才)	4 才
8	自分で洋服をきる	79.7 (66.2)	93.7 (96.1)	98.1	99.2	99.2	" (4才)	4 才
9	ぬいだ靴をきめられた場所にきちんとおく	75.8	78.1	78.5	78.6	79.6	"	5 才
10	ぬいだ着物をせいとんする	64.5	72.0	77.5	77.9	82.9	5 才	5 才

4才ではかなり積極的にできる。しかし、都会では、交通事故防止や近所に友だちがいなかつたりするために、室内でおとなとばかり遊んでいて、遊びの経験不足からくるこうした能力の欠けた非社会性児もかなりいる。

調査の結果、ごっこ遊び、かくれんぼ、かけっこ、簡単なゲームなどは4才で90%近くできる。集団遊びが4才ではかなりできることを表わしている。きめられた時間をだいたい守るのは5才、トランプ、カルタ、すごろくなどのできるのは5才、年上の人に挨拶ができることや、ドッジボール、陣とり遊びなどは6才、遊びの規則

をかえたり、新しく作つたりできるのは7才、スポーツや遠足の計画がたてられるのは8才ぐらいになつてからであらう。

(5) 自発性(自主性)(Spontaneity)

日常生活において、その能力をもつていても発揮しない場合は、能力がないのとあまり異ならない。本調査では、自発性(自主性)の程度を調べたのであるが、この領域の項目については個人差が大きい。家庭における乳幼児期からのしつけが大きく影響するものと考えられる。溺愛・盲愛された子、放任・拒否された子などによつてそれは違つてくるであらうからである。だから何才ででき

(7d) 基本的習慣—睡眠—

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令	可能年令 (山下)
1	ねまきに着がえてからねる	95.8	96.2	96.2	96.6	96.8	4才以下	
2	いつもねどこへ行つてねる	93.2	95.8	96.8	97.9	98.3	〃	
3	ねる前に便所へ行く	93.2	94.7	95.3	96.8	97.0	〃	2 才
4	きまつた時間にだいたいねる	89.0	90.9	92.7	93.0	93.3	〃	
5	ひとりできげんよく起きる	87.4	90.3	90.6	90.7	91.2	〃	
6	ひとりできげんよくねる	83.9	98.9	93.6	94.8	95.6	〃	
7	へやを暗くしてねる	82.3	87.2	87.3	91.5	93.1	〃	
8	朝早くめをさます	76.8	76.9	77.7	79.4	79.8	〃	
9	「おやすみなさい」と挨拶をしてねる	73.9	74.0	74.4	74.8	77.3	4 才	4 才
10	自分でねどこの始末をする	22.9	29.6	40.4 (7.1)	47.5 (18.9)	56.9 (44.4)	8才以上 (10才)	

(7e) 基本的習慣—食事—

No.	項 目	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	可能年令	
1	キャラメル of 包紙をむいてたべる	99.9	100.0	100.0	100.0	100.0	4才以下 (1才)	
2	ひとりでコップの水をのむ	99.9	100.0	100.0	100.0	100.0	〃(1才)	1才半
3	食事をするのに茶わんがもてる	99.4	99.6	99.6	99.6	99.7	〃(1才)	1才半
4	自分でおつゆをのむことができる	98.7	98.7	99.3	99.5	99.7	〃	1才半
5	食事をするのに、はしを使つて食べる	98.4 (98.6)	99.0	99.8	99.9	99.9	〃(2才)	3 才
6	たべられるものを見わける	97.7	98.4	98.8	99.4	99.8	〃	
7	あまりこぼさないでひとりでたべる	93.2	95.1	96.7	98.2	98.7	〃 (2才)	3 才
8	「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをする	90.3	90.3	91.1	93.0	95.2	〃	3 才
9	はしでこまかい豆のようなものをつかむことができる	88.1	91.4	94.2	96.5	98.3	〃	
10	よくかんでたべる	88.1	90.5	90.7	91.1	93.4	〃	
11	茶わんとおさじを両手でいつしよにもつてたべる	84.4	85.9	86.8	87.8	88.2	〃(2才)	2才半
12	食事をするのにおさじを使つてたべる	81.9	82.3	82.6	83.5	83.7	〃(1才)	1才半
13	食事を口の中にいれたままでは話さない	81.3	83.0	86.2	86.7	88.7	〃	
14	食事中あまりおしやべりしないでたべる	79.0	81.0	83.9	85.2	85.6	〃	
15	姿勢を正しくしてたべる	76.5	82.0	83.8	84.5	85.6	〃	
16	ごはんはいつもきれいにたべ終わる	74.5	82.3	84.2	88.9	90.3	4 才	
17	食事のとき手伝いができる	68.7	76.2	79.8	81.5	89.5	〃	
18	魚の骨などをはしでよりわけてたべる	62.3	71.4	78.8	87.5	92.0	5 才	5 才
19	食事のあとはしばらく静かにしている	62.6	63.3	64.4	66.1	70.4	8 才	
20	おやつはきめられた時間にたべる	54.5	60.5	65.6	65.8	67.7	〃	

るという問題でなく、どのようにしつけられて今日どのように習慣化され、行動しているかの問題である。各項目の通過率をみてもわかるように、年令による進歩はいくらみられるが、その進歩は緩慢である。たとえば、14番の「絵本をみてしまうと、もとにきちんとしまう」の通過率は4才—69.4%、5才—73.6%、6才—73.8%、7才—74.6%、8才—77.9%であつて、4年間の発達はその顕著ではないのである。しかし、全国的な傾向はTable 2(5)のようである。

(6) 自己統制 (Self-control)

自発性と同様に、わがままをおさえ、忍耐強く自己の行動を統制する能力は、乳幼児期からの正しいしつけによつて養われる。現代の子は、行動的、活動的である反面、衝動的、せっ的な面もあつて、こうした自己統制とか忍耐力などの面は欠けるといわれている。しかし、比較すべき資料が少ないので、そうした時代的变化は追究しかねる。現在の実態だけを示すと Table 2 (6) のようである。

少しのけがでも泣かない、夜中でも明るいとお手洗に行けるなどは4～4才半、2～3時間のるす番は6才ぐらいからである。買いぐいは7才ぐらいから少なくなる。これらの問題は、自発性の問題と同じように、4～8才にかけての年令的進歩にあまりみられない。家庭のしつけ方によつて大きな影響があると考えられよう。幼児期におけるこうした自己統制とか忍耐力の欠如は、将来の非行・学業不振・登校拒否などの原因にもなる。

(7) 基本的習慣

清潔、排泄、着衣、睡眠、食事などの基本的習慣は、Gesell, A. (1943, 1946) や山下俊郎 (1954) などによつて考察されているが、だいたい満4才おそくとも満5才までの間に、ひととおりの完成するといわれている。したがつて、子どもは、幼児期のうちに、ひととおりの自分の身のまわりのことを自分で処理する習慣をつけ、自立を獲得するのである。本調査結果でも、大部分の項目が4才以下で80%以上できている。本調査対象が4才以上であるから、各項目について、何才ぐらいで可能かを細かに示すことはできないが、山下の調査した結果を併記しておく。

清潔の習慣は、健康の保持増進にとつて衛生のうえから必要であるが、乳児のうちから母親のしつけ態度によつて形成される。平均して2才ごろからできはじめ5才ぐらいまでに自立した習慣ができる。Gesellも歯をみがくことは4才、入浴のとき自分で洗うことは、5才できると報告している。

排泄の習慣は、8～9か月ごろからしつけが始められ小便は3才半で、大便は4才半ぐらいで自立ができるのが普通である (山下俊郎, 1954)。

着衣の習慣は、衛生的な問題よりも衣服を身につける行動の自立の問題に中心がある。この習慣は2才ごろから衣服をぬごうとする傾向があらわれ、5才ごろになれば自立する。しかし、この自立は、服装、帽子や靴の型に関係がある。幼児に自主性を養うには、自分できちんとできるような型のものを与えると早くできる。

眠ることは人間の生得的な営みのひとつであるが、寝るしたく、就寝時刻、寝つきなどの睡眠の習慣は、乳児期からの母親のしつけ方に左右される。これらの習慣は1才半ごろからでき5才半には自立するが、わが国には添い寝、添い乳という伝統的悪習があつて、外国に比べて自立がやや遅い (山下俊郎, 1948)。

食事の習慣は、子どもの手先の運動能力の発達に応じて自立の習慣ができる。スプーンをもちたがつたり、茶わんを持ちたがつたりして、自分で食べようとするのは Fenton, N. は、1才3か月にあらわれるといい、Gesell

も同じく生後15か月ごろといっているが、山下はわが国の幼児ではおそくとも1才6か月ごろに、このようすがあらわれると報告している。そして5才になれば、はしのもち方も成人なみになり、自立していく。なお、食事時の態度は、母親のしつけかたに大きく影響される。

以上5つの基本的習慣についてのべたが、こうした習慣は、先天的な習慣と後天的なしつけとによつて形成される。これらの習慣形成には、子どもの心身の発達からみて最適期 (Readiness) がある。子どもの身体的な成熟が十分できていないときには、排泄の習慣や食事の習慣を適当に形成させることはできないであろう。McGraw M. B. は、2対の一卵性双生児を使つて小便のしつけについて研究しているが、早くから訓練することは、成熟をまつて訓練するのと変らないのであるから、成熟の方が大切な条件であるといっている (山下俊郎, 1954)。このように、習慣形成は、単なるしつけや学習だけでなく成熟の条件も大切である。しかし、しつける時期をはずして遅れるとしつけにくくなるから最も適した時にしつける必要がある。

2. 各領域の発達

すでに評定段階の説明で述べておいたように各領域ごとに得点を合計し、領域別の発達を調べてみると Table 3, 4, 5, および Fig 2, に示すとおりである。なお、荒川勇・古厩勝彦 (1963) の研究では性差はほとんど認められないし、本研究でもそうであつたから、この分類はしなかつた。しかし、地域差はかなり顕著であつたので、全体の集計は、各年令ともに都市と農山漁村とを別々に行なつた。

Table 3 作業能力・運動(移動)能力の発達

年 令	4:0 4:3 4:6 4:9 5:0 5:3 5:6 5:9 6:0									
	{ } { } { } { } { } { } { } { } { }									
	4:2	4:5	4:8	4:11	5:2	5:5	5:8	5:11	6:2	
作業能力	都市	11.2	12.2	12.8	14.0	14.3	14.6	14.1	15.2	16.1
	農漁村	10.3	10.5	11.8	12.1	13.0	13.7	14.3	15.4	14.8
運動(移動)能力	都市	14.1	14.3	15.0	15.4	16.8	16.3	16.7	17.1	17.5
	農漁村	12.6	12.2	13.7	13.9	14.8	15.6	15.5	16.1	16.2
年 令	6:3 6:6 6:9 7:0 7:3 7:6 7:9 8:0 8:3									
	{ } { } { } { } { } { } { } { } { }									
	6:5	6:8	6:11	7:2	7:5	7:8	7:11	8:2	8:5	
作業能力	都市	16.7	16.7	16.9	17.2	17.5	17.6	18.3	18.2	18.6
	農漁村	15.5	16.8	17.0	16.4	17.3	17.4	18.1	18.6	18.1
運動(移動)能力	都市	18.1	18.0	18.4	18.3	18.8	18.6	19.1	19.1	19.4
	農漁村	16.6	17.5	17.8	17.8	18.2	17.8	18.6	18.9	19.0

Table 4 意志交換能力・集団への参加能力の発達

年 令		4:0	4:3	4:6	4:9	5:0	5:3	5:6	5:9	6:0
		$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$
意志交換能力	都市	12.6	13.7	14.8	15.1	15.6	15.7	16.6	16.8	17.4
	農漁村	12.3	12.9	12.5	13.1	13.4	14.2	14.8	15.4	15.8
集団への参加能力	都市	12.0	12.5	14.2	14.7	15.1	15.8	16.2	16.5	17.1
	農漁村	11.6	11.5	12.7	13.2	14.6	14.4	15.0	15.5	15.9

年 令		6:3	6:6	6:9	7:0	7:3	7:6	7:9	8:0	8:3
		$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$
意志交換能力	都市	17.7	17.6	18.2	18.5	18.9	18.7	19.1	19.0	19.4
	農漁村	16.3	17.5	17.3	17.2	18.0	18.0	18.6	19.0	18.8
集団への参加能力	都市	17.7	16.9	17.5	17.8	18.3	18.0	18.4	18.8	19.2
	農漁村	16.1	17.2	17.5	17.0	17.5	17.6	18.5	19.0	18.5

Table 5 自発性（自主性）・自己統制の発達

年 令		4:0	4:3	4:6	4:9	5:0	5:3	5:6	5:9	6:0
		$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$
自発性（自主性）	都市	12.2	13.0	15.7	16.0	16.1	16.2	16.5	16.8	17.0
	農漁村	12.9	13.2	13.5	13.7	14.9	14.4	15.2	15.4	15.7
自己統制	都市	12.4	12.3	14.5	14.7	15.1	15.1	15.6	16.3	16.3
	農漁村	12.5	12.1	12.5	12.8	13.6	13.5	14.5	14.6	14.6

年 令		6:3	6:6	6:9	7:0	7:3	7:6	7:9	8:0	8:3
		$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{2}$
自発性（自主性）	都市	17.7	17.0	17.3	17.1	17.9	17.5	17.9	18.1	18.5
	農漁村	15.8	16.3	16.6	16.1	17.3	16.3	17.8	18.4	18.5
自己統制	都市	16.8	16.6	16.9	17.0	17.8	17.6	17.8	18.0	18.5
	農漁村	14.8	15.4	16.1	15.4	16.4	16.7	17.3	17.8	17.1

作業能力・運動（移動）能力は、Table 3 に示すように年令とともに発達しており、特に、運動能力の発達は、身体・体重の発達と類似した傾向がみられる。地域差は8才にいたるまでであり、農山漁村の子より都市の子の方がすぐれている。意志交換能力の発達は、Table 4 に示すように、低年令では地域差が大きく、都市の子は、農山

漁村の子に比較してすぐれている。しかし、6才以上になるとその差異も漸次減少している。集団への参加能力の発達は意志交換能力と類似した傾向がある。しかし、地域差はそれほど大きくなく、また8才以上になると差違もほとんどなくなっている。自発性（自主性）、自己統制の発達は、Table 5 に示すように、発達は緩慢で、4才で60%以上できており、5才で70%に達している。しかし、7才、8才になつても85~90%であつて、完全な自立に達することは困難である。なお、地域差があり、都市の子の方がすぐれている。以上の作業能力、運動（移動）能力、意志交換能力、集団への参加能力、自発性（自主性）、自己統制の6領域の得点を合計した社会生活能力を年令別にし、その分布状態を図示したのがFig. 1である。この図をみてもわかるように、4才児は得点の平均も低く、標準偏差の平均も大きい、5才~8才になるにつれ、得点も高く、標準偏差も小さくなっている。標準偏差が小さくなるのは、問題内容が、低年令児に適する問題が多く、7~8才児にできるこの領域の問題が少ないことからきている。

基本的習慣（清潔・排泄・着衣・睡眠・食事）の総得点の発達曲線をFig. 2に示す。それは、4才の後期にかけて急激に発達するが、その後の発達はあまりみられない。前にも述べたように、基本的習慣は4~5才でだいたい完成するのであるが、本調査でも4才から4才5

都 市	M	47.00	52.49	53.21	53.75	54.71	54.90	55.18	55.06	56.10
	SD	7.07	6.81	5.64	5.10	4.94	5.24	4.98	4.74	4.60
農漁村	M	47.15	50.10	49.81	52.15	52.42	53.12	52.49	53.43	54.95
	SD	7.02	6.02	6.87	6.23	6.51	6.08	6.48	5.67	6.08

Fig. 1 社会生活能力の年令別得点分布図

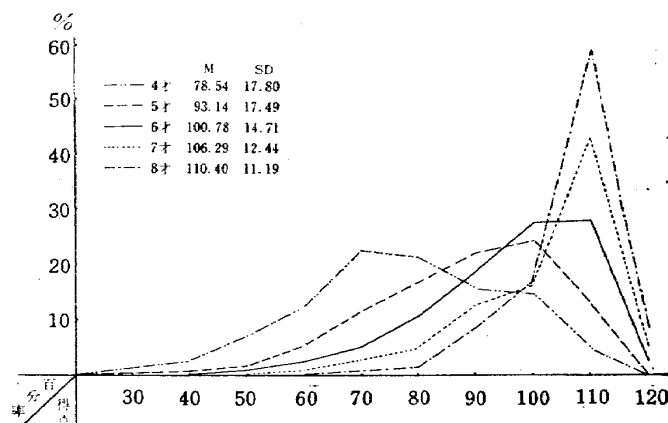
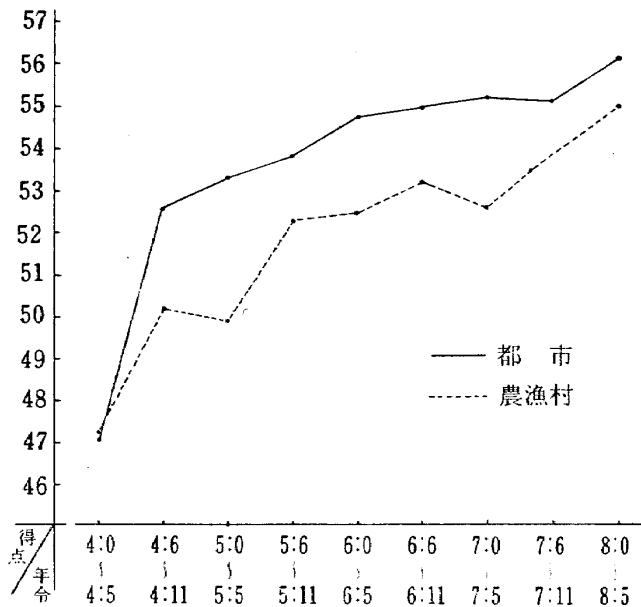
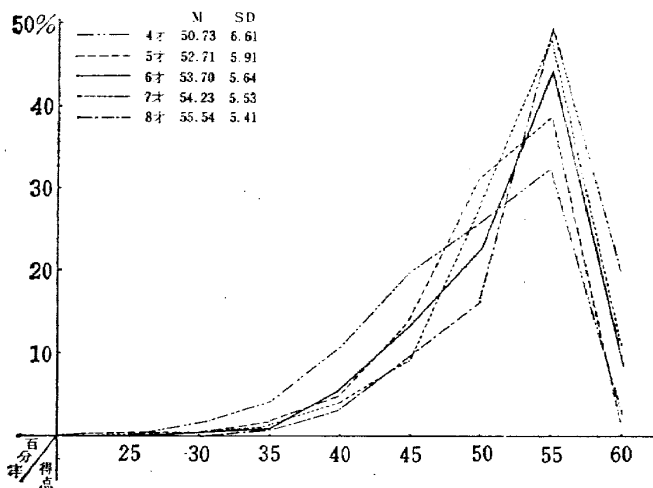


Fig. 2 基本的習慣の発達



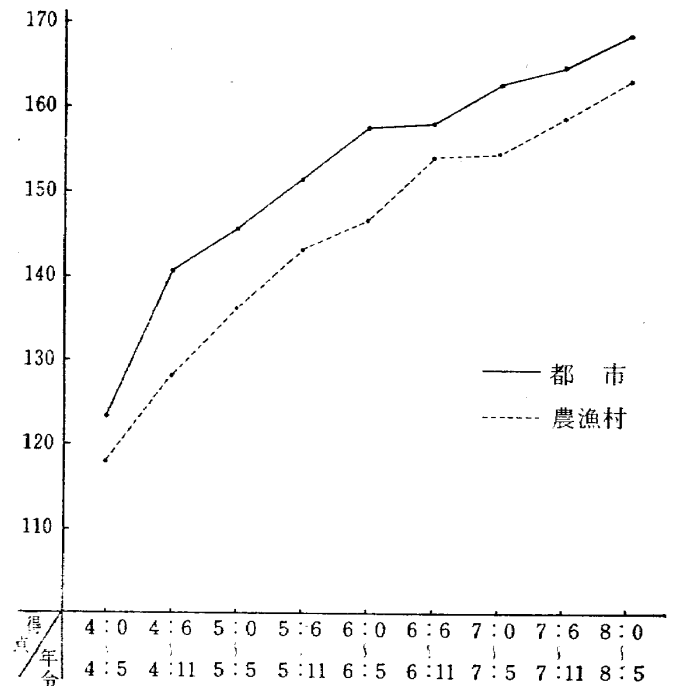
カ月で、約 80% できている。4才6カ月から4才11カ月で 85% できているわけであるから、その後の進歩はあまりないのも当然であろう。Fig. 3 に年令別の分布状態を図示したが、やはり5才以上はほとんど差異がな

Fig. 3 基本的習慣の年令別分布図



都市	M	122.74	140.52	145.44	151.46	157.49	157.93	163.12	164.80	168.72
	SD	25.10	20.99	20.27	17.99	16.44	17.38	14.86	13.20	5.92
農漁村	M	117.73	128.21	136.12	143.04	146.50	154.25	154.51	158.79	163.41
	SD	21.50	21.22	22.30	22.27	21.85	19.56	19.08	18.45	8.77

Fig. 4 社会成熟度の発達曲線



い。

社会的成熟度の7領域180問題の個人平均得点の発達の傾向をみたのが、Fig. 4である。この図をみてもわかるように、年令とともに得点は上昇しているが、地域差は、8才になつてもあり、どの年令においても都市の子の方が農山漁村の子に比較してすぐれている。玉井の研究(1954)においても同様なことが指摘されている。都市の子は、一般に知能が高く、また社会生活水準も高く、幼児期からの対人的接触も多い。こうしたことが都市の子の、社会生活能力の発達に影響を与えているものと考えられる。

3. 社会生活能力の発達に影響を与える要因

社会生活能力の発達に影響を与える要因として、伊藤隆二(1958)は、身体的発達、知的発達、性格、親子関係、社会的階層、地域差などをあげているが、ここでは(1)出生時の状態、(2)健康状態、(3)兄弟数および出生順位、(4)家族数の4つの面から考察することにした。

なお調査対象は諸条件を統一するために、調査人数の多かった5～7才児に限定した。しかも都市と農山漁村の子どもでは発達が違うので、都市の幼稚園児で、さらに調査項目に記入した子どもだけを対象とした。

(1) 出生時の状態

出生時の状態が正常であるか異常であるかは、その後の幼児の心身の発達に影響すると考えられるから、社会生活能力の発達にも当然影響があると考えられる。そこで、出生時の体重から未熟児(2500g以下)、普通児

(2501~3500g), 成熟児 (3501g 以上) に, 出産状態から仮死, 逆子, 双生児, そして早産児 (前述のものと重複する場合もある) に分類して, 各群の社会的成熟度指数 (SQ) を測定した。SQ は次の公式によって求めた。

$$\text{社会的成熟度指数 (SQ)} = \frac{\text{社会成熟年令 (SA)}}{\text{生活年令 (CA)}} \times 100$$

結果は, Table 3 に示すようである。

Table 6 出生時の状態・健康と SQ

状態 要因 M. SD	出生時の状態							健康	
	未熟児 (2500g以下)	普通児 (2501~3500g)	成熟児 (3501g以上)	仮死	逆子	双生児	早産児	肺炎	消化不良
N	28	132	19	20	12	5	60	14	28
M	88.21	106.25	113.42	101.00	106.67	75.00*	97.83	96.43	95.71
SD	19.28	29.02	25.19	26.22	25.11	20.98	24.91	25.31	24.34

* 人数が少数でてるからさらに検討が必要である

未熟児は, 中学3年生まで身体・体重・座高・胸囲・肺活量・握力・背筋力・跳力など身体的発達が成熟児に比べて劣るという報告 (中島清美, 1962) があり, こうした身体的発育の遅滞が社会生活能力の発達の遅れの原因にもなろう。さらに未熟児だけでなく, 身体的虚弱児, 盲・ろう児など身体的に欠陥のある子どもも遅れている (荒川・古既, 1963, 佐藤泰正, 1959)。その点, 普通児や成熟児は, 身体的発育が良好であるから SQ も高い (未熟児は, 普通児・成熟児に比較して, 1%水準で有意差あり)。

仮死, 逆子の場合は, 調査結果では, SQ が 100 以上である。しかし, 仮死状態で生まれた子の場合, 症状によって発育は違うであろうし, 未熟児であれば, SQ は低くなる。この点は, さらに追求する必要がある。双生児は, 一般に身体的発育がやや劣り, そして, 双生児同志の遊びやコミュニケーションが多く, 他の友人との接触が少ないために, 社会性に乏しい。本調査でもこのことが実証され, SQ の平均が 75.00 でかなり低い (双生児は普通児, 成熟児, 仮死, 逆子に比較し, 1%水準で有意差あり)。早産児の場合は, 平均が 97.83 で普通児よりやや低い (有意差なし)。

(2) 健康状態

身体的発達と同様に, 健康は子どもの社会生活能力の発達に影響することは明らかである。ここでは, 6才までに比較的多人数のものが患った肺炎, 消化不良になった子どもについてのみ SQ を算出した。その結果は Table 6 に示すようであるが, 普通児に比較するとやや低い結果を示しているが, 統計的には有意差はない。

社会生活能力は, 社会環境や家庭環境などによる影響が多いと考えられるので, それを実証する一つの方法として, 兄弟数・兄弟順位, 家族数について考察した。この場合の被験者は次のように統制して, できるだけ他の要因が重複しないように努めた。すなわち, 都市の幼稚園の5才の男女を対象にし, 出生時は正常で, 大病歴はなく, 栄養は普通または良好, 出生時の体重は 2501~3800g の正常, 両親健在で, 知能は普通以上 (最劣は除外), その他性格行動など特別目立った異常性のないものを選んで, それぞれの SQ を算出した。

(3) 兄弟数・出生順位

兄弟数では, SQ の高い順に並べると3人兄弟, 2人兄弟, 4人兄弟, ひとり子の順であつて, ひとり子が98.33で他の兄弟のある子どもに比較すると低い (統計的には

Table 7 兄弟数・出生順位と SQ

兄弟 順位 M. SD	ひとり子	2人兄弟			3人兄弟				4人兄弟
	1人子	長子	末子	平均	長子	二子	末子	平均	平均
N	24	76	60	136	9	24	33	66	21
M	98.33	111.71	113.17	112.35	114.11	112.50	114.00	113.47	110.21
SD	29.53	32.18	34.13	34.02	33.81	10.01	36.10	35.21	24.20

有意差なし)。Hall, S. G. が「ひとり子であることは、それだけでひとつの病気である」とのべているが、確かに非社会的であり、自発性に乏しく、自己統制も低い傾向がある。依田新ら (1961) の研究においてもひとり子は依存性が強いと報告している。

一般にひとり子の言語発達、兄弟のある子より遅れているようだが、本研究のように、社会生活能力の全体の発達は、兄弟のある子より遅れている。なお、最近では子どもの数が減少して、4人兄弟以上の調査対象児の人数が少なかったのは残念であつた。

出生順位は、2人兄弟、3人兄弟内での長子、第2子、第3子のSQの比較である。2人兄弟では末子の方がやや高く、3人兄弟では、長子、末子、第2子の順になっているが、その差はいずれも小さく統計的に有意差はない。出生順位と言語発達については、Stern, W., Smith, M. E., 山下俊郎など多くの研究者によつてなされているが、研究者によつて意見が異なり、出生順位による重要な差異は見出されないのが一般的傾向である (山下俊郎, 1948)。言語発達に影響する社会生活能力と出生順位についても、上記のように明白な傾向は見出せなかつた。

(4) 家族数

家族数 (調査対象児を含めた) の大小と社会生活能力との関係を調べた結果は、Table 8 のようである。すなわち、3人家族 (全部ひとり子) の小人数家族の子のSQは94.50で最も低く、ついで8人の大家族の子が低い。最も高いのは6人家族の子で119.05である (3人家族の子のSQは、4～7人家族の子のSQより5%水準で有意に低い)。

しかし、家族数と社会生活能力とに関係があるのではなく、その家族の構成 (祖父母の有無、使用人の有無)、家族員の性格、職業、子どもに対する態度の方がより強く影響することは他の研究でも明らかにされている (伊藤隆二, 1958)。ただ本研究でいえることは、家族数が少なすぎると対人的接触や経験が少なく、SQが低くなることが考えられる。同じひとり子でも3人家族 (両親だけ) の場合は、他の場合のひとり子よりも低くなっている。なお、家族数と社会生活能力との関係は、さらに

Table 8 家族数とSQ

家族数	3人	4人	5人	6人	7人	8人
N	18	106	63	36	15	9
M	94.50	110.32	113.51	119.05	110.55	100.01
SD	25.83	20.38	22.03	20.01	25.21	24.12

他の面からの考究が望まれる。

IV 今後の問題

前述のように、質問紙法によつて子どもの社会的成熟度を測定し、それに影響を与えると思われる諸要因の中のいくつかについて分析した。しかし、それで子どもの社会生活能力の発達や人格形成の機制 (mechanism) が明らかになつたわけではない。それには数多くの不明な点が残されており、また研究中ないしは結果の分析中に気づいた多くの疑問がある。それについて以下にのべてみる。

(1) 社会生活能力を社会生活に必要な能力と考えたがこの能力は、どのような社会においても共通なものなのか問題である。たとえば、未開社会における社会生活と文明社会におけるそれとは違ふし、明治時代と今日では社会生活様式も違つている。そうした点、どの社会においても共通の能力だけをいうのか、いちおう現代文明社会における生活能力をいうのか問題である。本研究では後者をとつた。

(2) 質問紙法を用いたので、その調査の手続きから結果の解釈に限界がある。ここで得られた社会生活能力は母親または保護者の目をとおして得た子どもの能力である。そこで母親または保護者の目をとおすという主観性はどうしても除かれない。観察者の社会的条件、教育的関心度、要求水準などにより同じ子どもの行動のうけとりかたもちがつてくるであろう。

(3) 研究対象を4才以上にしたが、実際の項目は、かなり低年齢でもできる項目を含んでいた。その点、さらに低い2～3才児にも対象を拡大して検討する必要がある。それと同時に、7～8才児にはやさしい問題が多すぎたので、今後は高年齢児にも適するような問題を含め検討したいと考えている。

(4) 社会生活能力に影響を与える要因分析は、このような質問紙法による項目間の関連分析だけでは、因果関係の追究にまで至ることはできない。そこにおのずとひとつの限界がある。長期にわたる観察ないしは実験的な研究が必要である。

(5) 特に、身体的発達、知的発達、性格などと社会生活能力との関係、家庭環境、とくに親の育児態度との関係など追究すべき面が多くある。

V 要 約

4才から8才までの子どもの社会的成熟度の発達を調査研究することと、社会生活能力の形式に影響を与える要因について若干の考察をすることを目的とした。社会

的成熟度の内容は、作業能力、運動（移動）能力、意志交換能力、集団への参加能力、自発性（自主性）、自己統制、基本的習慣（清潔・排泄・着衣・睡眠・食事）の7領域、180項目である。

対象は、全国の11幼稚園、8保育所、15小学校の3000人の子どもの母親または保護者に、上記の質問紙を配布し、調査研究した。そして、各問題別の通過率と各領域の発達傾向を調べた。結果は、つぎのようである。

(1) 都市の子どもの社会生活能力は農村の子どもよりすぐれている。

(2) 性差については、その差は認められない。

(3) 社会生活能力は、年令とともに発達するが、“自発性”“自己統制”“基本的習慣”などの発達速度は緩慢である。“基本的習慣”は、ほぼ5才までに完成する。

(4) 双生児、未熟児などの社会成熟度指数(SQ)は、普通児より低い(1%の水準で有意)。肺炎、消化不良など大病を患った子どものSQもやや低い傾向がある。

(5) 社会生活能力の発達には、兄弟数も関係があり、ひとり子、特に両親とひとり子だけの家族数の少ない家庭の子はSQが低い。

なお、社会生活能力の発達は、子どもの成熟と学習とが影響する。それゆえ、将来の研究としては、こうした能力を十分発達させるには、子どもの成熟に最も適した時期に、最も適した方法で学習させることが大切である。

(追記) 本研究は、田中教育研究所からかなりの資料を借用しまとめたものであり、本研究にご指導いただいた所長の鈴木清先生、ご校閲いただいた中野佐三、上武正二、田中熊二郎、辰野千寿の諸先生に厚く御礼申し上げます。また研究にご協力いただいた田中教育研究所の研究員と幼稚園、保育所、小学校の諸先生、保護者の皆さまに深謝申し上げます。

参 考 文 献

- 荒川勇・古厩勝彦 1963 ろう児の社会成熟、東京教育大学教育学部紀要、9、119—130。
- Doll, E. A. 1947 *Vineland Social Maturity Scale*, manual of directions. Educational test Bureau,
- Gesell, A. 1943 *Infant and child in the culture of today*. New York; Harper. (依田新・岡宏子訳、乳幼児と現代の文化、新教育協会、1951.) 361—376.
- Gesell, A. 1946 *The child from five to ten*. New York; Harper. (周郷博訳：児童の心理学—5～10才まで—新教育協会、1951)
- Gesell, A. 1940 *The first five years of life*. New York; Harper. (山下俊郎訳：乳幼児の心理学—出生から5才まで—新教育協会、1949)
- 伊藤隆二 1958 社会生活能力、教師養成研究会幼児教育部会編：幼児の社会性指導、学芸図書KK、93—107.
- 倉石精一 1949 社会性発達テストについて。児童心理と精神衛生、3、22—38
- 前田嘉明 1956 発達の加速現象、(波多野完治・依田新編) 児童心理学ハンドブック。金子書房。69—84.
- 中島清美 1962 未熟児の発生並びに発育に関する社会医学的研究—学童期第8学年時における身体的精神的発育発達状況—。長崎医学界雑誌、37—10 別冊。302—327.
- 佐藤泰正 1959 盲児、弱視児の社会性の発達について 東京教育大学教育学部紀要、5、102—126.
- 杉田裕・玉井収介・山口薫・藤島岳 1959 S.M.社会生活能力検査、東京心理KK
- 杉田裕 1949 社会生活能力検査について。児童心理と精神衛生、3、607—613.
- 鈴木清 1961 社会成熟度診断検査。日本文化科学社。
- 武政太郎 1958 総説発達心理学。講談社、287—494.
- 玉井収介 1954 幼児の社会的成熟に関する研究(I・II・III)。児童心理と精神衛生、4、169—178、272—378、351—358,
- 牛島義友 1949 社会的生活能力検査、牛島義友・波多野完治編：児童の心性と能力検査、巖松堂書店。91—125
- 山下俊郎 1954 改訂幼児心理学、巖松堂書店。309—347
- 山下俊郎 1948 教育的環境学。岩波書店。252—255
- 依田新他 1961 質問紙による幼児の依存性の研究。教育心理学研究、9、9—20.

(1964年4月28日原稿受付)

ABSTRACT

1. Describing the picture itself (pointing to the objects of the card or naming them).
2. Subject's own feelings (describing the card from the subjective point of view).
3. Subject's experiences (associating the theme with his experiences or memories).
4. Describing the phenomenon itself.
5. Describing the cause or process of the phenomenon or asking for such explanation (extending the interests to the how and why of the phenomenon).
6. Functional explanation of the phenomenon or asking for such explanation (grasping the principle and the function of the phenomenon).

Each individual protocol for each card was sorted out into 6 categories, and they were plotted down in one sheet so as to show the individual interest-profile.

IV. Results

- a) The 3rd graders have many questions, and these questions cover a wide variety of areas.
- b) There are individual differences in the intellectual interests. Some children show the scattered

interest-profile, while others show the narrow interest-profile.

c) About 52% of the total responses have fallen under the category of describing the cause or process of the phenomenon or asking for such explanation. It may be said that the children of this age (8 & 9 yrs) have their modal developmental level of thought under this category.

d) As to the themes, 'Space' and 'War' were popular with the subjects.

e) There are few differences between boys and girls in the intellectual interests.

f) The developmental level of the intellectual interests do not always correspond to the academic achievement.

From the above outcomes, the authors conclude that children who are advanced in their intellectual interests but are relatively low in academic achievement need to be studied very carefully. They may have potentiality for better progress under the program which capitalizes on his ability of raising meaningful questions.

THE DEVELOPMENT AND EFFECTIVE FACTORS IN SOCIAL MATURITY OF CHILDREN

by

Tatsuya Matsubara

Tokyo University of Education

The purpose of this study is to survey social maturity of children and analyze the factors which are supposed to influence the development of social competence of them.

A form of questionnaire was devised which contained 180 items referring to social maturity. These items are grouped into those seven aspects as "Occupation", "Locomotion", "Communication", "Socialization", "Spontaneity",

"Self-control" and "Fundamental habits" (cleanliness, toilet habits and dressing, sleeping, feeding oneself). The questionnaire was filled out by the mothers and teachers or sometimes fathers of 3000 children of 11 kindergardens, 8 nursery schools and 15 elementary schools which were sampled from every main part of Japan. Ages of the children ranged from 4 years to 8 years.

The results of the survey of social maturity and

analysis of the factors influencing children's social competence were as follows;

1. Urban children were superior to rural ones in social competences.

2. There was no significant difference between males and females.

3. Every aspect of social competences seemed to develop as the individual grows. "Spontaneity", "Self-control" and "Fundamental habits" developed relatively slowly with ages; however, "Fundamental habits" were established by the age of five.

4. Twin, immature and premature children

showed slow development in social competence.

5. The development of social competences is closely related to the number of the family members. For example, a child who lived with no others than his father and mother showed lower SQ than the one who lived with brothers and sisters.

It was found that children acquired social competences through physical maturation and learning. An important thing to be investigated in the future is when and how a child best develops his social competences at a given age.

A STUDY OF PERSONALITY TRAITS IN OVER-ACHIEVERS IN SCHOOL CHILDREN

by

*Masao Nakamura,
Hirosaki University*

The purpose of this study is to find out personality traits that are supposed to provide pupils' academic achievement. For that purpose, especially for the over-achievers, an investigation was carried on for thirteen traits of "Behavior Records" in "Guidance Digest" and fourteen traits of mental hygiene.

The academic achievement was determined by the results of Japanese and arithmetic evaluated by the teachers, other personality traits were determined by pupils' own self-evaluation expressed in the questionnaire.

The subjects for this investigation were 2330 school children of the fourth, fifth, and sixth grades who were divided into 570 over-achievers, 1195 normal-achievers, and 565 under-achievers.

As for the personality traits that were evaluated by these three group achievers, the χ^2 -Test was used to judge the difference between the groups, while the fundamental traits which were the features of

over-achievers were abstracted by the factor analysis.

Results :

The results can be summarized as follows :

No significant difference was found in both results of the χ^2 -Test and factor analysis between over- vs. normal-achievers, normal-vs. under-achievers, but that difference was noticeable between over-vs. under-achievers.

These significant traits were integrated into three personality dimensions. They were :

- (1) a dimension of general self-concept : independence, self-respect, elevation, positiveness, self-control, endurance, and introversion thinking.
- (2) a demension of emotional adjustment : sense of self-importance, inferiority complex, excitability of feeling, depression, nervous prostration, security of emotion, and sentiment.
- (3) a demension of social adjustment : responsi-